The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者の相互行為能力の諸相ー関係性、自己、物語行為ー
Author(s)	佐川, 祥予
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73486
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　佐川祥予　）	
論文題名	日本語学習者の相互行為能力の諸相―関係性、自己、物語行為―

論文内容の要旨

本研究では、第二言語習得・教育のための言語観として語用論的転回を迎えた社会構築主義の視点を取り入れて検討し、そうした言語観に基づいた自己について語る表現活動を日本語クラスで実施することを通じて、日本語学習者の相互行為能力の内実を浮き彫りにした。

第二言語習得・教育研究においては、認知的主義的なSLA研究と、ホリスティックな社会的コンテキストの立場に立つSLA研究という異なる言語観に基づく潮流があり、互いに異なる能力観を提示している（Kramsch 1986、Firth & Wagner 1997、Chalhoub-Deville 2003、Larsen−Freeman 2007）。Kramsch（1986）によって相互行為能力の観点が提出されて以来、後者の立場をとる研究者たちによって、相互行為能力の研究がなされてきた。しかしながら、言語はコードではなく社会的に構成されるものであると主張するにとどまり、言語観についての議論は十分になされていないことから、相互行為能力の内実を具体的に定義するという段階には至っていない。第二言語教育は、人文科学全体の言語観の変遷を踏まえて議論される必要があり、認識論的転回、言語論的転回、そして更なる語用論的転回へという一連の流れを見れば、第二言語教育においても言語の社会性が叫ばれることは必然である。従来の第二言語教育の研究や、相互行為能力の研究においては、言語と自己形成、他者との関係構築、自己について物語るという行為の重要性等には、光が当てられてこなかった。相互行為能力を描くのであれば、表層的な言語のやり取りの形式を見るだけでは不十分である。本研究では、自己について語るという表現活動を大学の日本語クラスで実施し、学習者の相互行為過程について「フレーム」（Goffman 1974）、「Storyrealm」「Taleworld」（Young 1987）、物語の循環（ブーバー1979、吉田2003、2007）の3つの手法を用いて、自他関係、物語世界と現実世界の関係、自己形成にそれぞれ焦点を当てて多角的に相互行為の様相を浮き彫りにした。その結果、上級者と初級者に共通する物語の構造や他者との関係性構築過程が多く見られた。本研究は、学習者の能力観の再考、相互行為能力という概念の具体的な策定に寄与するものである。

本論文の研究のステップは以下の4つの段階に分けることができる。(1)は第1章、(2)(3) は第2章から第4章、(4)は第5章から第7章に相当する。

(1) 第二言語教育における能力観・言語観のパラダイム・シフトを概観しながら、現在なされている相互行為能力の定義を論じる。

(2) (1)の第二言語教育における言語観の変遷を人文科学全体の思想運動の中に位置づける。その際、語用論的転回を迎えた社会構築主義における言語観を参考にし、第二言語教育のための言語観を補強し、「関係性の言語観」として再構築する。

(3) (2)の言語観から導き出される教育的で有意義な教室内における言語活動を具体的に策定する。

(4) (3)の言語活動を実際に大学における日本語クラスで実施し、相互行為過程を分析する。

第1章では、まず、Kramsch（1986）の論考で提唱された相互行為能力を再検討し、メタ言語のスキルとしての相互行為能力の重要性を再浮上させた。次に、Kramschの言語観を補強しメタ言語スキルを具体化するため、バフチンの言語観、社会文化理論を取り入れたHall（2004）やJohnson（2003）の言語観を参照した。さらに、それらを2つのリサーチクエスチョンとして集約し、第二言語教育においてどのように相互行為研究へアプローチすべきかの指針として設定した。第2章では、言語そのものではなく言語を使用する発話者への着目、即ち、言語の社会性への着目は、認識論的転回、言語論的転回、語用論的転回へという人文科学全体の潮流として認識できるものであることを論じた。とりわけ、第二言語教育における言語観の議論を進展させていくものとして、社会構築主義の言語観を形づくっているウィトゲンシュタインの言語ゲームに着目した。ガーゲン（1997、1999）を中心に、言語ゲームに参加する人々の関係性の中から言葉の意味が生み出され、現実が構成されるということを検討した。

また、その際、言葉は物語という形式を通して表出される。物語という視点は多様な記述のあり方、つまり、現実が多元的に構成されるということを示していた。第3章では、第2章で述べた関係性の言語観をバフチンの思想と照らし合わせ、補強する作業を行った。第3章の中心課題となったのは、「自己についての語りが自己を形成する」という言語と自己形成に関する観点であった。ガーゲンが提示していた物語という形式を通した自己表現―語りによって現実・自己が形成されるという現象―については、バフチンの言語観によってその内実が明らかとなった。バフチンの自他論やクロノトポスの観点からは、実在の世界と物語世界という2つの世界の存在、2つの世界にいる2人の私の存在が浮き彫りとなった。2つの世界と2人の私の一致が自己と他者の間で共有されることで、自己及び自己を取り巻く世界が構築される。自己について語る行為は、自己から他者への対話、自己から内的自己への対話という2つの対話を同時に行う高度な言語活動であった。第4章では、私たちの生活において、様々な言語ゲーム・言葉のジャンルが運営されている中で、とりわけ、身近で子供から大人までが共有し、かつ、国籍の異なりを超えて誰もが共有している言語活動の領域とは何かを論じた。自己形成としての語りは、経験を解釈するための行為であり、人間の発達過程の早い段階で始まることが明らかとなった。また、物語行為には2つのスタイルがあることを、吉田（2003、2007）のブーバーの対話論に拠りながら論じた。

第1章から第4章までを踏まえ、第二言語教育に適した言語と認知の発達を促すような言語活動のジャンルとして、自己について語るというジャンルを設定することができる。自己について語るという行為はひとつのことばのジャンルとして捉えることもでき、また同時に、様々なことばのジャンルに入り込んでいるジャンル横断的な言語活動でもある。自己について語ることは、単に自己を叙述することにとどまらず、他者にどのような自己として表出すべきか、これまでの自分の生き方を踏まえてこれから自己はどうあるべきか、といった対他者・対内的自己に対する関係性を構築する力が求められる高度な言語活動であり、活発な相互行為能力が発揮されるジャンルである。本論文では、こうした活動を「自己表現活動」と呼ぶ。日本のX大学、タイのY大学の日本語クラスにおいて自己表現活動に主眼を置いた日本語教育を実施し、対面での相互行為場面を分析した。第5章で実施概要について述べ、第6章及び第7章で分析手法とデータの提示を行った。3つの分析手法を用いることで、他者に対して、自己に対して、また、世界に対しての向き合い方を丁寧に調整しながら自己を表現する学習者の姿を捉えることが可能となった。フレームの維持に注意を払いつつ変容させ、他者との関係性を構築していくことができること、世界をどのように認識するのかに応じて異なる語り方を用いることができること、自己を他者として眺めながら、真実味・一貫性のある自己をつくることができることなどの、同時並行的に発揮されるメタ言語のスキルを相互行為能力として本論文では記述した。相互行為能力を研究するにあたり、言語と自己の形成、言語と自他関係の構築といった観点は非常に重要である。このような語りの能力というのは、文法的正しさや、語彙の豊富さなどでは測ることの難しいものであり、従来の第二言語教育の枠組みからは見落とされてきた学習者の姿である。また、これまで、初中級学習者などを対象とする語りの研究は分析の難しさから多くなされてこなかったが、本研究では、こうした初中級の学習者にあっても、十分に豊かな言語活動が行われていることを明らかにした。このことは、言語の能力とは何をもって測ることが可能なのかという新たな問いを教育者側に投げかけることになるだろう。物語るという人間の営みとしての言語活動は、第二言語教育のあり方を再考するための視点を与えてくれるものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　佐川祥予　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	西口光一
	副 査	准教授	力武京子
	副 査	教授	義永美央子

論文審査の結果の要旨

Firth and Wagner (1997)が第二言語習得研究における認知心理主義と社会文脈主義という2つの傾向を指摘して以来、社会文脈主義の第二言語習得研究が盛んに行われるようになった。一方で、第二言語話者が有する言語能力あるいはコミュニケーション能力についても、Canale and Swain (1980)のコミュニカティブ・コンピテンスの定式化以降もさまざまな議論と研究が行われている。本論文はそのような脈絡の中で、改めて相互行為能力の概念を探究し、一方で実証的な研究として相互行為能力の表れを実際のデータにもとづいて記述しようとする試みである。

第１章から第４章までが言語と言語能力についての理論的な論考、それを承けて第５章と第６章が実際に実践された表現活動の教育実践とそれを分析する視座についての議論、そして、第７章が収集したデータの実際の分析となっており、ひじょうに論理的な構成となっている。第１章では同じように相互行為能力といってもさまざまな立場があることを指摘し、相互行為能力という概念の原点であり、「現実」や対話者たちの自己（self）が構成されるその様態に目を向けるKramschの見方に注目し、関連の研究と絡めながらそれを注意深く検討している。第２章では、Kramschの相互行為能力の概念をGergenの一連の社会構成主義についての議論と結びつけて関係性の言語観という視座を提示している。そして、こうした考究はより広く第３章でのバフチンの言語哲学とウィトゲンシュタインの言語ゲーム論と接続されて、最終的に第４章の広く物語行為という観点から相互行為能力を見るという視点を提示している。この４つの章（うち２章は既出版の論文に加筆修正したもの）は、相互行為能力という問題意識からスタートして最終的にブルーナーのストーリーの心理学やブーバーの対話論に至っており、その議論の行程はひじょうに緻密でひじょうに価値のある論考となっている。

そして、第６章で、相互行為を物語行為として多角的で多面的に分析するためにその手法として、ゴフマンのフレーム分析、ラボブの物語の分析とYoungの物語行為の分析、ブーバーの語りの循環構造の分析という３つの分析法を提示し、第７章では、そうした分析手法を駆使して、他者との相互行為を通して、言語そのものの知識や能力ではないという意味でのメタ言語的な相互行為能力の発現の様態を綿密に記述することに成功している。

第二言語教育において教室での「現実」や自己（self）の時々刻々の構成がなおざりにされており、その部分に光を当てるためには、相互行為能力という概念を理論的な足がかりとして、教室での学習者による言語活動におけるそうした能力の発現を描き出さなければならないという野心的な動機から始まった本研究だが、十分に所期の目標を達成していると評価できる。相互行為能力をメタ言語能力と言っているがその趣意が十分に記述されていないこと、データの分析部分でフレームの名付けの基準が明確に示されていない点など、いくつかの課題はあるが、本論文の価値を損なうものではない。また、理論的考究の拡がりとして社会文化史的な観点を含めることが期待されるが、これも理論的研究の次のステップと見てよいだろう。

以上のような理由で、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。